

円光の世俗の五戒と花郎集團について

福 士 慈 稔

新羅仏教を研究するに際し、最初に論究せねばならないものの一つに花郎集團及び弥勒信仰の問題がある。花郎集團とは新羅・百濟・高句麗の三国時代に於て、新羅が半島を統一するに至る原動力となった武士集團である。その制定年次・目的に関しては未だ決定的な論究がなされているとは言いがたく、花郎集團と弥勒信仰との結合時に關しても問題が存する。この小論では男性花郎の制定年を真興王三十七年（五七六）制定の目的を人材の登用と軍事的訓練とし、花郎集團初期に於ては弥勒信仰の影響を受けていないという立場に立脚し、花郎集團と弥勒信仰との結合時に關して少しく論じる。

新羅に於ける弥勒信仰については、法興王十四年（五二七）の仏教公認後、覺徳が仏舍利を齎らし、中国僧明観が經論千七百余卷を齎らしたとされ、真平王代（五七九～六三二）までを期限とすると、安弘・安含・智明・曇育・円光等、その他多くの求法僧が帰国したと考えられるが、彼らの事跡からは弥勒經典の将来及び弥勒信仰の実態を窺うことはできない。

い。仏像から考察すると、「三国遺事」中の弥勒像についての記載は、真智王代（五七六～七九）の興輪寺像を除くと他は全て七世紀から八世紀中頃までに集中している。現存する仏像も韓国国立中央博物館蔵の金銅半跏思惟像（国博像）を百濟作とみると主尊となりうる大規模なものは七世紀以降となり、新羅に於ける弥勒經典に關する著作の降盛期と一致する。

史料に於ける最初の弥勒關係の記載は、先の真智王代で弥勒像降盛期より数十年も早い。「三国遺事」弥勒仙花未尸郎真慈師条によると「真智王の代に及び、興輪寺に僧真慈なるものあり。毎に堂主弥勒像の前に就き原しみて誓言を發す。願はくば我が大聖、化して花郎となり世に出現せんことを。我れ常に辟容に親近し奉じて以て周旋せんと（略）。一夕、夢に僧あり。謂って日く、汝熊川の水源寺に往かば弥勒の仙花を見るを得んと。（略）王之を敬愛し、奉じて国仙を為せるに、其の子弟に和睦し礼義風教なること常に類せず」と記さ

れており、男性花郎制定の数年後に花郎集団と弥勒信仰の結合がなされたとされる。しかし、この条には若干の問題が残る。なかでも特に問題とすべきは、

○興輪寺の主尊が弥勒とされること。

○弥勒を求めて熊川に行ったこと。

○出自不明の未戸郎が花郎になったこと。

以上の三点である。○については「三国遺事」密本摧邪条に、武烈王代（六五四～六一）の大臣金良図が仏法に帰依し、興輪寺の主仏である弥勒尊像と左右の菩薩の塑像を造り、金色で堂の壁画を描かせたと記されている。八世紀の甘山寺では弥勒・弥陀を金堂・講堂それぞれに奉安した例もあるが、興輪寺に於ては金堂・講堂の存在が確認できず、主尊が弥勒か弥陀かの問題がある。○については、百濟では聖王十九年（五四一）の仏師来朝に起因し以後頻繁に弥勒像が造立されたこと、日本への仏教伝来時の仏像が弥勒像とされ、五八四年に甲賀氏が百濟から弥勒石像一体を持ち帰ったこと、又、新羅から弥勒像が日本に来たのが六二二年と百濟に比して遅れることから、真慈の頃、百濟では新羅よりも弥勒像造立が盛んであったことが知られる。又、武王代（六〇〇～四一）初期に、竜華山の麓で弥勒仏が出現したことにより創建された弥勒寺の規模が東洋最大級であったことから百濟の弥勒信仰の隆盛ぶりが窺える。ここで百濟の弥勒信仰が新羅に与えた

影響と共に、真慈の頃の新羅での弥勒像・弥勒信仰の実態を考え直す必要がある。○については、花郎になりうる出自を真骨とすると、出自不明の人物が貴族の若者集団である花郎集団の指導者となることは不可能であり、いわゆる下層階級からの登用にしても元聖王四年（七八八）に読書三品科が定まるまで待たねばならず、未戸郎花郎説に疑問が生じてくる。以上の点から考察すると、この条のみによって花郎集団と弥勒信仰との結合時を捉えるのは説得力に欠けると考えられる。真興王・真智王代に於て出自の分明する花郎は史料上見出すことはできず、真平王（五七九～六三二）以後に限られる。又、「三国遺事」考昭王代竹旨郎条に、朔州都督使述宗公が竹旨嶺で知り合った居士を嶺上の北峰に葬り、石で弥勒像を造り墓の前に建てたところ、妻が身ごもり竹旨が生まれ、竹旨は成長し花郎となり金庾信と共に三韓を統一した、ということが記され、「三国史記」列伝金庾信条に、六〇九年庾信が十五歳で花郎となった時、彼の徒を竜華香徒と呼んだ、とある等、真平王代に至って初めて、実在の入物で出自の明確な花郎と弥勒との結合が顕著となる。

花郎集団と仏教思想との結合については、六〇〇年に隋から帰国した円光の「世俗の五戒」に注目したい。「三国史記」列伝貴山条に、貴山と籌項が円光に終身之誠の教示を求めた時、円光は「仏戒に菩薩戒あり、その別に十あり、汝等は人

の臣子たり、恐らくは堪ゆる能わず」として、一日事君以忠、二曰事親以孝、三曰交友以信、四曰臨戰無退、五曰殺生有挾、以上の「世俗の五戒」を教示したことが記されている。「世俗の五戒」に関しては「提謂波利經」・「顔氏家訓」帰心篇等の影響が窺われるという見解があり、円光が求法以前は儒教に精通していたこともあり五戒中の一・二・三には、五戒五常一致の影響が考えられる。臨戰無退・殺生有挾は、円光の涅槃經研究からも考えられるが、当時の三国間の状況から、新羅社会の要求に応えたものといえる。又、この「世俗の五戒」が花郎集団の基本理念となったことの一例としては「三国遺事」二恵同塵条に、花郎の好世俗と親交があった僧の恵宿が、花郎瞿昆公の谄を諫めたことが記されており、殺生有挾の影響が窺われる。

円光に対し、占察会との兼ね合いから、円光を弥勒信仰の徒と考える向きがある。しかし、占察会の所依經典「占察善惡業報經」には、弥勒の名は一度も頭われず、八世紀の中頃の真表に至り初めて、新羅に於て独自に占察会中地藏・弥勒の融合がなされたものである。七世紀の円光の頃は、中国（廣州・青州）に流行していたものをそのまま行なったにすぎず、それをして円光を弥勒信仰の徒とするに無理があるろう。

又、弥勒信仰を戒律主義と捉え、円光の「世俗の五戒」を弥勒戒律主義の帰結とする示唆に富む見解があるが、円光の僧

伝をみる限りに於て円光と弥勒との関係を見出すことはできない。現段階では花郎集団に於ける円光の果たした役割は、花郎集団の理念の中に仏教的要素を与えたというに留める。

眞平王代（五七九～六三二）、特に七世紀に入ってから、花郎は金庾信・欽春・近郎・竹旨郎・好世郎・瞿昆公・居烈郎・実処郎・宝同郎と九名を教え、降盛を極め、又、同王代から出自の明確な実在の花郎と弥勒との結合がなされる。そして、円光以前に花郎の理念中に仏教的要素を見出せず、円光に弥勒信仰を見出すことができないことから、花郎と弥勒の結合は眞平王代中六〇〇年以降と考えられる。又、外的要因を捉えるならば、隋末大業六年（六一〇）、同九年（六一三）の「弥勒仏出世」を唱えて立上った弥勒教の乱に注目できよう。反体制的な民衆反乱と護国の為の集団としては本質的に異なるが、花郎降盛期と時を同じくしており、少なからぬ影響を受けたものと考えられる。ともかくも、花郎制定時に於いては花郎と弥勒信仰との結合はなされておらず、両者が結びつくのは六〇〇年の円光の「世俗の五戒」以後と考える次第である。以上、紙幅の都合上概略を述べたにすぎないが、「世俗の五戒」、「円光の弥勒信仰」等については稿を改め論究してみたい。（註略）

△キーワード▽ 花郎、円光、世俗の五戒、弥勒信仰

（立正大学大学院）